あれから百年…… るもい百年をふり返る

明治十年、現在の古丹浜に留萌戸長役場を設置、この年を開基の年と定めてから十月一日でちょうど百年、大きな節目の年を迎え、また留萌二世紀への第一歩を踏み出したわけです。

そこで、この百年の歳月を顧みるとともに、次の留萌建設の糧となるよう、足早に百年をふり返ってみることにしました。

二世紀の留萌が、より発展することを祈りながら……。

留萌は開基から今日まで、明治大正、昭和と三代の年号を経て、百年という意義ある年を迎えました。下段の年表とともに、その時どきの背景を、郷土史家として活躍された故栄井直蔵氏著〝ここに郷土あり〟から抜粋させていただき、掲載してみました。

《明治の留萌》

つぼみの留萌誕生へ

留萌は明治元年、庄内藩引揚げのあと明治二年九月まで支配者空白、最初に山口藩に支配され、明治五年になり開拓使札幌本府の宗谷支庁の管轄下に入った。

そして六年から宗谷支庁が留萌に移って留萌支庁となった。

明治十三年からは開拓使の出先機関は郡役所―戸長役場の二本建となり、明治十四年七月、留萌外五郡役所が増毛に移って増毛外五郡役所になってから明治三十年十月、郡役所が支庁制にかわるまで十七年間、留萌は増毛郡役所の管轄下にあった。

そして明治三十五年、二級町村制により留萌村となるまで戸長役場時代が明治七年から二十七年間（十一代の戸長）つづいたのである。町制をしいたのは明治四十一年六月で、町時代は昭和二十二年の市制施行までの四十年間続いた（十二代の町長）のである。

留萌支庁～留萌町の地元に道庁の出先機関があるという行政態の確立したのは大正三年からで、この間十七年間は増毛支庁管轄に甘んじなければならなかった。

明治後期の二十四年間は、留萌市史全体の流れにおいて、特に指摘すべき多くの史実を含む期間である。

この期間を〝つぼみの留萌〟と形容されるべく、そこには近代都市留萌形成の要因が内在する。

明治二十年、岩村初代北海道庁長官の北海道拓殖基本方針に基づくメークの港湾適地調査によって留萌人は商港留萌への町是の樹立と実現に開眼した。

明治二十四年の第二回帝国議会への第一次築港請願運動は、その具体的な現われであり、北海道の拓殖方針に対し受動的姿勢から積極攻勢に転じたのはまさにこの時からといえるのである。

明治三十五年は二級村、四十一年になって町制施行により自治体の体制がととのえられた。

築港運動も続けられ、四十三年着工によって、ついに運動以来二

…一世紀をふり返える…

《明治10年1月》 戸長役場を川北に設置／この年を市の開基と定める／郡戸長は八谷理兵衛・副戸長に堀内喜八就任。

▽**11年**・4月開拓測候所が設置される／郡戸長に本間秀蔵が就任／この当時の人口六百六十七人。

▽**12年**・7月郡庁長役場を留萌外2村戸長役場と改称する。

▽**13年**・3月留萌外5郡役所（留萌・天塩・中川・上川・増毛・苫前の各郡）を設置、初代郡長に一柳平太郎就任／4月留萌外二村戸長に森野重次郎就任／9月留萌小学校（留萌学校）が開校する。

▽**14年**・7月留萌外5郡増毛に移り、増毛外5郡役所となる。

▽**15年**・4月札幌病院留萌出張所閉鎖され無医村となる／亀本初太郎が私設火防組を作る。

▽**16年**・8月留萌外二村戸長に島影嘉が就任する／9月札幌県令に市街地計画書（現都市計画の始まり）を提出する。

▽**17年**・6月三泊小学校（三泊学校）が開校する／11月礼受小学校（礼受学校）が開校する。

▽**18年**・大和田付近で石炭採掘の試み／当時の郡戸数百七十五戸、人口八百九十二人。

▽**19年**・9月留萌外二村戸長に小川謙輔が就任／留萌水産組合設立

▽**20年**・4月留萌外二村戸長に佐藤武次が就任する／増毛警察署留萌分署（留萌警察署）を設置／8月英人C・Sメーク港湾調査のため来村する／10月村有志が電信架設を道庁に請願する。

▽**21年**・2月留萌外二村戸長に伊山徳次郎が就任する／新市街地計画案を道庁官に陳情する。

▽**22年**・留萌小学校新築／7月定期航路船、初めて入港（樺戸丸・飛竜丸）

▽**23年**・広井勇・港湾調査のため来村する／新市街開さく組合設立

▽**24年**・5月留萌外二村戸長に磯松年太郎が就任する／12月帝国議会に留萌港築港を請願／留萌郡戸数二百九十二戸人口千四百四人。

▽**25年**・9月戸長役場が川北から新市街地（本町一丁目）に移転、当時の役場財政九百七円。

五十嵐億太郎

父億太郎の思い出

大町三　五十嵐　松　子さん（明治四十年生まれ70歳）

七歳の時（明治二十三年ごろ）に大日本水産会経営水産伝習所（後の農林省水産講習所）に在学、海の勉強をしたと聞いています。

いつも勉強好きな方でした。

事業家でもあって、漁場開拓を始め、海馬島の開発、当時としては活気的な缶詰工場などの建設にも着手したようでした。

港づくりの直接の動機は、故郷である下北郡下風呂の磯浜と違って安全な川をもつ留萌川に着目したのが始まりのようでしたね。

とにかく海にその生涯をかけ、五十七歳の一生を閉じました。」

「小さいころの、父の思い出といいますと、いつも家にいない人だったように思っていました。

それでも、あの当時、東京から帰ってくると、いつも私を抱きあげてくれて、今の湊神社の所から港を見ながら、東京の話や、港の話をしてくれたことを覚えていますよ。とってもやさしい人でした。

反面、こうと思ったことは、一徹に打ちこんだ人で、だから留萌港づくりに、その生涯を打ちこめたんだと思うんですよ。父は明治六年に青森県下北郡で生まれ、十

▽**26年**・留萌蹄馬場設立／郡戸数四百戸人口千百四十一人

▽**27年**・4月太刀川兵助が駅逓取り扱いになる。

▽**28年**・2月簡易小学校を尋常小学校に変更／11月尋常小学校に高等科を併置し、尋常高等小学校となる／12月高等小学校が旧市街（大町）から留萌通り（現電通庁舎）に新築、移転する。

▽**29年**・4月留萌外二村戸長に安達応助が就任する／5月藤山に北陸地方から第一回の団体入植が始まる。

▽**30年**・8月築港調査のため井上馨が来村する／増毛外五郡を増毛支庁と改称／深川・留萌間鉄道線測量に着手。

▽**31年**・9月潮静小学校開校する／12月幌糠・峠下地区に入植。

▽**32年**・3月留萌外二村戸長に三田村千瓢が就任する／11月幌糠小学校が開校する／郡戸数五百九十二戸、人口二千七百八十七人。

▽**33年**・7月藤山小学校開校する／戸長役場を本町一から現在の市役所庁舎（幸町一）へ移す／戸数八百三十七戸人口三千九百四十人。

▽**34年**・留萌・妹背牛間の道路開通／戸長役場財政八千五百八十円

▽**35年**・4月留萌村に道二級町村制を施行、戸長役場から村役場と改称する・初代村長に伊藤孫右衛門が就任する／三泊村に戸長役場設置／6月鳥海直隆、留萌村収入役に就任する。

▽**36年**・4月留萌小学校寿町の現在地へ新築移転する。

▽**37年**・8月五十嵐億太郎・道会議員に当選する

▽**38年**・4月中幌糠小学校開校する／11月樽真布小学校開校する。

▽**39年**・6月村立留萌病院が開院する／郡人口七千六百六十人。

▽**40年**・2月留萌・深川間の鉄道敷設工事始る／4月留萌村に一級町村制が施行される／8月村長に石沢兵吾が就任する／8月原敬（内務大臣）が築港視察のため来村する／郡人口一万二千五百八十七人

▽**41年**・4月尋常高等小学校分教場を留萌尋常高等小学校となる／6月町制施行、留萌町となる、初代町長に石沢兵吾が就任する。

▽**42年**・9月峠下小学校開校する／郡人口一万三千四百六十五人。

▽**43年**・4月留萌築港工事に着手する／11月留萌・深川間鉄道が開通する／留萌に初めての電灯がつく／ハンドル式電話開始。

▽**44年**・5月町長に早坂清一郎が就任する／5月出田平馬が道会議員補選に当選する。

▽**45年**・大正元年・6月町長に中原郡一郎が就任する。

《大正のころ》

▽**2年**・7月町長に山下良実が就任する／出田兵馬道会議員に当選

▽**3年**・9月増毛支庁を留萌町に移し、留萌支庁と改称する。

▽**4年**・日石が峠下一帯をボーリングする。

▽**5年**・4月女子補修学校開校／8月出田兵馬六期道会議員に当選

▽**6年**・11月町長に福岡幸吉が就任する／留萌川水路堀さくに着手

▽**7年**・7月町長に野本治平が就任する／小平蘂村が分村する。

▽**8年**・官公庁が増毛から留萌に移り始める／人口一万五千七百人

▽**9年**・4月築港計画を変更、工期延長と内港の拡張／町議会、町債二百五十万円の借入れを議決／当時の北海道人口二百三十五万人

▽**10年**・10月町長に荒木正澄が就任する／11月留萌・増毛間鉄道が開通する／世帯数二千六百六十二・人口一万五千五百七十二人。

あのころの留萌

藤山町　笹島与作さん（明治三十五年生まれ75歳）

私はここに生まれ、ここに育ってきた、根っからの藤山ッ子です

そう、昔は山の中の一軒家で、道路はないし、隣りといっても、五百㍍も一㌔も離れていましたからね。今のように交通の便はないしね。

私の父は明治二十六年に、この藤山の開拓に入ったそうですが、大変な苦労だったそうですよ。

明治の後期の藤山、幌糠地区の山は、うっそうとした樹木が繁っていて、造材が盛んでした。

しかし、交通の便が悪く、道路もほとんどないような状態でした。

沢に木を倒して渡橋を作りながら留萌まで一歩一歩進んだんです

道路をつくるのも大変でした。今の国道は、細い道でね。冬になると馬ソリに砂利を積んで敷いたり、大和田炭砿の炭ガラをもらって敷いたものです。部落総出でねそしてようやく人の歩ける道路が留萌までついたんです。

明治四十三年には留萌、深川間に汽車が走ったんですが、ちょうど私が九歳でしたが、大きな機関車に驚いたことを覚えています。

汽車にのって、留萌の町へ行くことが楽しみでしてね。

今の札幌へ行くような気持だったことを覚えていますよ。

鉄道開通当時の留萌駅舎（上）と市内

大通りの風景（下）